刊行にあたって

本書は、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」による採択課題「アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究：モノから見るグローカルヒストリー（代表：岡田雅志、2019 年度）」の成果報告である。本研究課題は、アジアの薬用植物資源がいかに生産・流通・利用されてきたかを、歴史学、人類学、生態学など異なる専門分野、地域の研究者の間で議論をしながら研究し、地域社会と広域世界との連関を解明することを目的としたものである。ここでいう薬用植物資源というのはいわゆる漢方薬で処方される生薬原料である（生薬自体は動物・鉱物由来など多岐にわたるが植物由来のものが大宗を占める）。自然由来の生薬は、その賦存が自然環境に規定されると同時に、消費サイドも、気候変動などの環境変化に大きく左右される。さらに、漢方薬のように特定の医療知識体系に基づいて利用され、流通する。したがって、薬用植物資源に着目することによって、関係する地域間に横たわる社会、文化、経済の諸側面や自然環境の変容など様々な要素が見えてくるのである。

本研究課題では、共同利用・共同研究拠点の助成により、2019 年度に下記の通り計 3 回の研究会を開催し、共同研究員個々の研究報告に基づく学際的議論を行うことができた。

第 1 回研究会

2019 年 12 月 8 日（日）　於　京都大学東南アジア地域研究研究所

報告 1：岡田雅志（防衛大学校）「近世～近代におけるアジアの市場連関と資源利用――シナモンを事例に」

報告 2：柳澤雅之（京都大学）「地域文化が残す自然資源――鹿児島県さつま町のシナモン栽培」

第 2 回研究会

2020 年 1 月 31 日（金）　於　京都大学東南アジア地域研究研究所

報告：　石橋弘之（総合地球環境学研究所）「カンボジアにおける交易品の産地形成――カルダモン産地の開拓史再考」

第 3 回研究会

2020 年 2 月 4 日（火）　於　横浜国立大学常盤台キャンパス

報告 1：小田なら（千葉大学）「ベトナムにおけるシナモン利用法の変遷に

関する予備調査」

報告２：辻大和（横浜国立大学）「朝鮮王朝後期の薬用人蔘流通」

本書は、本研究課題で研究を進めた３つの薬用植物資源（シナモン、薬用人参、カルダモン）の内、シナモン（肉桂、現在の漢方では桂皮（ケイヒ）と呼ぶ）に焦点をあて、その生産・流通・利用を通じたベトナムと日本とのつながりを検討したものである。第１章、第２章では主にシナモンの生産・流通・品種の伝播と受容の歴史を扱い、第３章では日本の地域社会に残るシナモン利用の文化を考察している。第４章は本書の企画のきっかけとなったアジア農村研究会の鹿児島県さつま町フィールド調査（2019 年２月）のフィールドノートである。本書内の一部においては執筆者の間で微妙に見解が分かれる点もあるが本書のディスカッションペーパーとしての性格上あえて統一はしていない。また、本書は、科学研究費補助金（若手研究、課題番号 19K13366）研究課題名「近世から現代までの東南アジア山地民の移動が国家にもたらした影響に関する研究」の助成を受けた研究成果の一部でもあることを申し添える。

最後に、本書刊行までには、様々な機関・個人のお世話になった。助成研究をサポートしてくれた東南アジア地域研究研究所 CIRAS センター事務局、さつま町調査の機会を与えてくれたアジア農村研究会、驚くべきホスピタリティで地域文化の奥深さを教えてくれたさつま町の皆さん、そして研究会で様々な新しい視点を提示してくれた共同研究員の石橋弘之氏、小田なら氏、辻大和氏、同じく研究会で貴重な情報を提供してくれた高志緑氏、そして本書編集作業で献身的な協力をしてくれた伊藤ゆかり氏に厚く感謝を申し上げたい。

2020 年３月

岡田雅志・柳澤雅之